

吉川沙織君 民進党の吉川沙織でございます。

本日もどうぞよろしくお願いいたします。

NHK予算案、当委員会では、三月三十一日、年度末最後に賛成多数で承認はされました。しかしながら、NHK予算案は、結果として三年連続として全会一致とはなっておりません。まず、このことに対する会長と経営委員長の御所見を伺います。

参考人（浜田健一郎君） 受信料で成り立つ公共放送NHKの予算が三年連続で全会一致の承認をいただけなかったということは大変残念なことだというふうに思っております。

経営委員会といたしましては、国会での質疑の状況や附帯決議について随時経営委員間で情報を共有しております。さらに、今月十一日の経営委員会では、総括として、会長に対して早急に視聴者・国民の信頼回復に努めることを求め、経営委員会としても、全会一致の承認が三年続けてやら

れなかった結果を痛切に反省し、附帯決議を重く受け止めて、経営の最高意思決定機関としての職責を再確認することを申し合わせました。

以上でございます。

参考人（舩井勝人君） 二十八年度予算につきましては、我々としても皆様方に御理解いただけるよう誠心誠意御説明に努めたつもりでございます。結果として全会一致での御承認をいただけなかった。誠に残念でございます。

今後とも、視聴者の皆様の信頼を回復できるよう最大限の努力を続けてまいり所存でございます。

吉川沙織君 公表されている四月七日の会長会見の要旨を拝見いたしますと、今も会長から御答弁ございました。「われわれとしては、予算について誠心誠意、説明に努めたつもりだ」、これは公表されているもの。全文も拝見してもやはり同じように繰り返されています。本心でおっしゃっているのかどうかは私には分かりかねますけれども、なぜ全会一致にならなかったとお考えでしょうか。会長に伺います。

参考人（舩井勝人君） 先ほども申しましたけれども、我々としては御理解いただけるよう誠心誠意御説明したつもりでございますけれども、我々の誠意が不足しているということも言えるのかもしれないし、また、説明が十分でないということも言えるのかもしれないけれども、我々

としては本当に本心から誠心誠意説明をしたつもりでございます。

繰り返しになりますが、今後ともNHKの信頼回復のために全力を尽くしてまいり所存でございます。

吉川沙織君 四月七日の会長の定例記者会見全文を拝見いたしますと、なぜ全会一致にならなかったと思いますかという記者の問いに関して、いろんなことがあると思いますが、今年についてはやはり不祥事が一番の問題だったというふうに思えますと会長はお答えになられています。そのようにお考えなのでしょうか。

参考人（舩井勝人君） もちろん不祥事が全てとは申しませんが、これが非常に大きな理由の一つであったというふうには理解いたしております。

吉川沙織君 昭和六十三年から今回の平成二十八年度のNHK予算案まで全会一致とならなかった例というのは、これまでに九回ございます。三年連続全会一致にならなかった例は、今回の三回連続と、それから昭和六十三年、平成元年度、平成二年度が、これまた三年連続賛成多数、つまり全会一致が崩れています。でも、このときの国会の委員会会議録を見ますと、それぞれ反対しているのが自民以外の全部であったり共産党さんだけ反対だったり、しかも、反対討論、残され

ている会議録を見ると、それぞれしっかりと理由は異なっています。

でも、今回三年連続一緒だったのは、会長は実績、しかも反対討論を拾いますと、会長の言動と今年に関しては不祥事が多発でございます。会長としては不祥事が多発ということに重点を置きたい、そのお気持ちはよく分かります。でも、今、三年連続全会一致でないことの重み、こんな形での三年連続全会一致でないというのは初めてだと思います。

会長、何かございませんか。

参考人（舩井勝人君） 引き続き、誠心誠意、視聴者の皆様あるいはこの委員会の皆様の御理解を得られるよう努力を続けていくつもりでございます。

吉川沙織君 もしそうであるならば、三月三十一日、本会議の開会も、会長の不適切なこの委員会で発言によって遅れてしまいました。もし、誠心誠意丁寧に説明に努めるということであればあのような答弁で、不適切な答弁、発言はなかったのではないかと思います。

今、経営委員長から、答弁の中で二回、附帯決議を重く受け止めるという、このような御発言がございました。そこで、今年初めて追加された附帯決議の内容から質問を簡単にしてみたいと思います。

附帯決議に関しては、予算案本体と異なり附帯決議は衆参総務委員会共に全会一致で議決されています。今回新たに追加された内容として、例えば参議院の総務委員会では、「協会は、受信料で運営されている特殊法人であることを踏まえ、経営委員会及び理事会等における意思決定に至る過程や財政運営上の規律、不祥事に伴う処分、子会社等の運営の状況、調達に係る取引等について、議事録を含め、国民・視聴者に対する説明責任を十分果たすこと。」としています。

具体的に、議事録を始め情報公開の在り方、どのように改善していくおつもりなのか、経営委員長と会長に一言ずつ伺います。

参考人（浜田健一郎君） まず、附帯決議の件でございますけれども、経営委員会では昨年の附帯決議と今年の附帯決議と対置表を作りまして、今回こういう形で参議院、衆議院それぞれ御指摘をいただいたということを確認しております。

それで、あと、ごめんなさい、何て……。〔発言する者あり〕議事録の改善の問題も、私、経営委員長として、議事録の公開には透明性を重視して、我々の内規にのっとって十分にかなり気を付けて今までやってきたつもりだったわけですが、でも、今回、衆参で同様の御指摘をいただいたのも事実でありまして、これを受け止めて今後どういう形で改善できるかということは内部で議論を

しているところでございます。

参考人（舩井勝人君） 議事の公開につきましては、我々としては、内部の規則にのっとって今後も続けていくつもりでございますが、極力やはり理解いただけるような形での公開を心掛けていきたいというふうに思っております。

吉川沙織君 会長は四月七日の定例記者会見でも今おっしゃったとおりのことをおっしゃっています。せっかくのそういうものを出すのであれば、まあ極力分かりやすいように、何を議論したぐらいかは分かりやすく、やっぱり改善の余地があればそれはやっていけばよろしいんじゃないかというふうに思っておりますと発言されておりますし、今、経営委員長も、何か改善できるところがあればという、このような御発言ございました。

事実、NHKの理事会に関しては概要記載がほとんどでございますが、経営委員会の議事録に関しては経営委員会議事運営規則に基づいて公表はかなりされていると承知はしています。ただ、二年前の理事の任命に係るところでもかなり多くの議論になりましたが、やはりそれでも、人事に係ること、何々に係ることということで、伏せて一行記載で終わっていることも多々ございます。一年前のこの当委員会での質疑において、経営委員長と当時の総務委員長の差配で、経営委員会の議事運営規則を当委員会に提出をいただきました

した。これを拝見いたしますと、最後の改正は平成二十三年六月二十八日でございます。

これを見直すことも含めて検討いただけないかと思うんですが、経営委員長、いかがでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） 今後とも、先ほど申し上げましたように、経営委員会の中で御指摘を受けて議論をしてまいります。

吉川沙織君 是非議論をお願いしたいと思います。

その経営委員会では、一昨日、第一千二百五十八回の経営委員会だと思いますが、一昨日の経営委員会で理事の任命の同意が行われております。一括で経営委員会は同意したと報じられてもいますし、委員長も経営委員会の後のブリーフィングでそのようにおっしゃっています。二か月間にわたる専務理事が二人空白、こういった状態が続いていた理事ポストを含め、今回、一期二年だろうが二期四年だろうが、任期を迎えた全ての理事が交代する結果となっています。

二年前のこの委員会で私は、経営委員会の当日即日同意に対して、放送法施行規則第十九条第二項の趣旨に反する旨を指摘をさせていただきましたが、今回はどうだったんでしょうか。経営委員長、人事案は前で提示されたと思いますが、どの段階で提示されましたか。

参考人（浜田健一郎君） 慣例に基づき、事前

に、月曜日だったと思いますけれども、人事案をいただいております。

吉川沙織君 放送法施行規則第十九条第二項、「委員長は、経営委員会の招集の通知を行うときは、原則として、事前に十分な時間的余裕をもつてそれを発出するものとし、」となっています。

第一千二百五十八回の経営委員会は四月十二日、一昨日でございました。提示を受けられたのは前日だ、これは十分な時間的余裕を持つてのことだとお考えでしょうか、経営委員長。

参考人（浜田健一郎君） 中身にもよりますけれども、私どもが受けた感じは、今まで十分局長時代活躍された方が案として載っていたわけで、まあそういう時間はあつたのかなというふうに思っています。

吉川沙織君 経営委員会後の委員長ブリーフィングで、理事の人事案についての感想はと委員長問われて、いわゆる下馬評に挙がっていた人が順当に挙がってきたという感じとお答えになられていますので、今の答弁からしたら順当な人事だと委員長としては捉えていらっしゃるということだと思いますが、幾つか気になる点がございまして、会長にまず伺いたいと思います。

今回任期迎えた方は全員交代となりました。そして、新たな担務とともに発表されておりますが、今回、技師長、昭和三十九年からこの技師長とい

うのが規程により設けられていると承知しておりますが、技術職以外の方が技師長になったという例を私は知りません。過去に技術職以外の方が技師長になった例があるのかなのか、まずお答えいただきたいと思います。

参考人（初井勝人君） ございません。

吉川沙織君 昭和三十九年にNHKには技師長というポストが規程により設けられました。今、会長から過去に技術職以外の方が技師長になった例はないということを伺いました。

今、4K、8K、これ総務省も中心になって進めています。4K、8K時代、それから技術革新の時代に、技術系の役員、しかも技師長が技術系出身でもない。本当にこれでよいのでしょうか。経営委員会でもこのことに関してはやはり議論になったのではないかと思います。経営委員長、いかがでしょうか。

参考人（浜田健一郎君） まず、私といたしましては、今回の人事は新たなスタートを切るという会長の決意を反映したものだというふうに受け止めております。

技術職に関する御指摘は、経営委員会の中でも様々ありました。ただ、役員に必ず各職種から出さなければならぬということもないわけなんですけれども、やはりNHKの中における技術というものは今後の放送行政の中では大きな重みを持

つということは我々も認識をもちろんしております。

それで、経営委員会の会議を中断しまして、会長に本件についての善処を求めました。それに対して会長の方から、前向きに対応いたしますという回答がありましたので、経営委員会としては議決をしたということでございます。

吉川沙織君 今経営委員長から御答弁をいただきました。実際に、経営委員会後の記者ブリーフィングでも同じようなことをおっしゃっています。経営委員会でもかなり議論になった、技術は重要であり、技術担当役員は先を見通していくという役割でもある、そういう中で技術出身役員がいなくていいのかという議論はあった、その議論を踏まえて会長とも話をして善処を求めた、中断されて善処を求めたということは今初めて承知しましたが、これに会長としては対応されるということであった、理事としてはないがと、これブリーフィングを見ると付いています。

会長、そういうことなんでしょうか。

参考人（粕井勝人君） そのとおりでございます。

吉川沙織君 放送法第四十九条、「協会に、役員として、経営委員会の委員のほか、会長一人、副会長一人及び理事七人以上十人以内を置く。」つまり、理事という役職は、放送法、いつも会長

遵守されると常におっしゃっています、この放送法に規定されているNHKの役員は、会長であり、経営委員であり、副会長であり、そして理事です。その理事に技術出身の人を、放送行政がこれから求められる中、一人も置かないということは、この放送法の趣旨にのっとってもいかがなものかと思いますが、本当に理事として今後再考する予定もないということでしょうか。

参考人（粕井勝人君） 御質問の趣旨はよく分かるのでございますけれども、私は、技師長という役職は、理事の中での技師長は、技術部隊をマネージする、こういうポジションであると思っております。

御理解いただけたと思うんですが、実務における技術は、実際には技術局長もおりますし、技術研究所長もおりますし、そういう人たちが実務的に技術をつかさどっている、リードしている。その中で、三千人の技術部隊をどうやってマネージしていくか。これは必ずしも技術だけではないわけでございます。いわゆる人事もあれば、そういうコンプライアンスの問題、ガバナンスの問題等々があるわけでございます。

そういう意味におきまして、技師長という名のところにいわゆる文系の理事が付くということに抵抗があることはよく分かりますし、経営委員会でも随分その点を指摘されました。現実には、し

たがいまして、私は、その技術局長が研究所長か、こういう人を我々のマネジメントの会議に出てもらう、こういうことによって技術部隊と経営のコミュニケーションを良くすると。一方、技術局長は当然理事会には出ているわけで、あつ、技師長は出ているわけですから、この技師長は今回は文系でございますけれども、あくまでも技師長で技術集団のマネジメントを行う、こういう役割でございます。

吉川沙織君 今回、技師長は二期二年で退任を余儀なくされます。会長は、会長就任後、二年前の平成二十六年四月二十二日、第千二百十二回の経営委員会において今回二期二年で退任をさせる技師長をお選びになっています。このときの会議録、議事録を見ますと、「浜田氏は、技術の生え抜きです。久保田技師長の後任としてふさわしい方だと思えます。」と言って推薦なさっています。

二年前、今の技師長をお選びになるときも、マネジメントが必要だとか、そういう説明をされて任命されているならいざ知らず、二年前は技術の生え抜きということを理由に今の技師長を置いているわけです。ですので、やはり少し疑義を感じざるを得ないという、こういう懸念を申し上げて、更にもう一つ会長にお伺いしたいと思います。

今回の人事において、昨年理事に任命されたばかりのお一方がたった一年の理事経験で専務理事

に昇格されています。過去に同様の事例はございませんでしょうか。

参考人（粕井勝人君） 私自身でひもといたわけではありませんが、過去にもそういう例はあるというふうに聞いておりますし、そう認識しております。

吉川沙織君 過去の例を教えてくださいとお願いしたいしております。

参考人（粕井勝人君） 昭和三十三年理事が三十四年に専務理事になっております。それから、三十九年の理事任用者が四十年に専務理事になっております。それから、四十五年の理事が四十六年には専務理事になっております。

吉川沙織君 今会長から答弁をいただきました。専務理事に、理事になったばかりの人が一年の理事経験で、二年目で専務理事に昇格した例というのは過去に三例、昭和四十六年の例が最後です。四十五年にわたってこんな例ありません。

日本放送協会定款第三十六条によれば、「専務理事は、会長の定めるところにより、本協会を代表し、会長及び副会長を補佐して本協会の業務を掌理」するのに対して、「専務理事以外の理事は、会長の定めるところにより、本協会を代表し、会長及び副会長を補佐して本協会の業務を分掌」となっています。よって、専務理事と理事ではその果たすべき役割は大きく異なっています。だ

からこそ、NHKにおいては、四十五年にわたって、理事は一期二年やって、その後、退任していただくか、それとも専務理事に昇格していただくか、こういうことを積み重ねてこられたんだと思います。

会長、いかがでしょうか。

参考人（粕井勝人君） 私は、人事は適材適所ということで行っているつもりでございます。この四十年間、一年で専務理事になった例がないということですが、今回の件についても、私はまさに適材適所の方針で、一年しか理事をやっていない人を専務理事に任命したわけでございます。

吉川沙織君 適材適所という、こういう御答弁でございました。

去年、今回理事から専務理事に昇格される方をお選びになるときの平成二十七年四月十四日、第一千二百三十五回経営委員会、理事の任命の同意に係るところでこの方のことを称して、「「放送法の神様」といわれている人で、従来はスペシャリストとして、役員の道は歩んでいなかったのですが、昨今、国会審議などいろいろな場で放送法を参照しながら議論するケースが大変多くなっている環境下では、理事会に、そのような視点を持つた人が必要だと思いました。」そして、続いて、「放送法を中心にした考え方ができる専門性は経営上非常に大事だと判断しました。」。

これは、日本放送協会の定款第三十六条に定める専務理事と理事の違い、顕著に表れています。

理事であれば分掌です。専務理事であれば掌理する。掌理と分掌では大きく違います。専門性を大事にして理事に昨年登用したのであれば、少なくとももう一年は分掌させて経験を積ませるべきだと思いますが、このような観点に関して経営委員会では議論されましたでしょうか、経営委員長。

参考人（浜田健一郎君） 経営委員会では議論をしておりません。専務理事の指名は、定款に基づき、会長の権限で行われるものだとして理解をしております。

専務理事の指名につきましては四月十二日の経営委員会では会長から報告を受けておりますが、私といたしましては、会長が御自身の権限に基づき、諸条件を勘案して判断されたものと認識をしております。

吉川沙織君 確かに二年前のこの委員会でも相当議論をさせていただきました。担務も含めて、理事の選任、人事権は会長にございます。ただ、それが本当に、本当にNHKのためになるのか、受信料をお支払いいただいている視聴者や国民のためになるかという観点で経営委員会はその機能を最大限本分に発揮していただきたいという思いです。しかも、この国会でも、法規、先例に基づいて様々な議事運営や委員会運営が行われていま

す。もちろん、明文化されていないものもございます。NHKだって、定款には専務理事と理事の役割の違いを明確に明記し、実際、その運用として一年で理事になることを妨げるような文言はどこにもありません。でも、四十五年にわたって、理事になったばかりの人を二年目で専務理事にするということは四十五年間にわたって行われていなかったという重みは受け止めて、今後は判断をしていただきたいと思います。

経営委員長と監査委員に、最後、伺いたいと思います。

日本放送協会の経営委員会の経営委員の任期満了が実は迫っている方が四人、そして欠員状態になっている方が一人いらつしやいます。任期満了年月日は六月十九日、今年の六月十九日でございます。この経営委員に関しては国会の同意人事案件でございます。議院運営委員会の理事会で衆参同日同時にこれが提示される予定でございますが、私、今議院運営委員会におります、来週にでも提示を受けるための理事会がセットされる見込みでございます。

浜田経営委員長と上田監査委員は六月十九日が一旦の任期満了です。再任されるか、それとも退任なさるのかは私には知る由もございません。国会の同意人事は事前に漏れるとそれはおかしいことになりますので、当日まで知る由はございません。

ん。しかしながら、任期が来るということだけは事実でございます。この二年間、会長と経営委員長と監査委員には最長で百十分の質疑にもお付き合いをいただいてまいりました。この間、二年前の一月二十五日以降、混乱の中にあり、三年連続予算案が全会一致とならないような事態、それから、様々な不祥事も続き、いろんなことが恐らく局内でも現場でもあったと思います。この二年間を踏まえて、率直な感想を監査委員と経営委員長に伺いたいと思います。

参考人（上田良一君） お答えいたします。

私は、平成二十五年度の六月に常勤の経営委員を拝命いたしました。翌七月、監査委員に選任されました。就任以来、監査委員の役割を十分に自覚しながら、誠心誠意、放送法に定められた職責を果たすべく取り組んでまいりましたし、今委員がおつしやいましたように、この総務委員会におきましても何度が答弁に立ちまして、報告書も提出いたしましたけれども、私の方では精いっぱい監査委員としての役割を果たしてきたというふうに自覚いたしております。ただし、その間、本体や関連団体で職員や社員の不祥事等が相次いだということは非常に遺憾に思っております。

私といたしましては、残された期間は短いのですが、引き続き、任期の中で監査委員としての役割を果たすべく、精いっぱい努力してまいりたい

というふうに考えております。

参考人（浜田健一郎君） 私といたしましては国会の同意を得て任命されるという経営委員の重い職責を自覚し、職務に当たってまいりました。でございます。特に平成二十四年九月から経営委員会委員長としてより重い責任を果たすため、NHKの諸課題に対して経営委員間の真摯な議論を重ねつつ、運営をしてまいりましたつもりでございます。しかしながら、この三年間、NHKの予算は全会一致の承認をいただけませんでした。大変残念なことだといふふうに思っております。一方、吉川先生を始め各先生方からこの場でたくさんの方の厳しい御意見、御指導もいただきました。感謝を申し上げます。

一方で、放送業界を取り巻く世界の動きは急速に早くなっております。放送と通信の融合時代に向けた公共放送のあるべき姿について国民的合意を得るための議論も行つ段階にきているという思いを強くしております。また、放送法で定められた公共放送NHKの使命に対する自覚もますます役員に求められているといふふうに思います。

私といたしましては、残りの任期を最後まで精いっぱいやるつもりでございます。

吉川沙織君 上田監査はまだ先があるような答弁にも聞こえましたが、浜田経営委員長はまるで今期をもって退任をなさるような挨拶にも聞こえ

てしまいました。たくさんこれまで質問をさせていただきました。再任されるか退任なさるか分かりませんが、もしかしたら会長と浜田経営委員長と上田監査に対する質疑はこれが、三人そろっては最後になるのかも分かりません。

ただ、今、全会一致に三年連続ならなかったというお話でございました。その翌日に行われたNHKの入局式の会長訓示、どんなことをお話しされたんだろうと思って全文を求めたところ、結局お出しただけませんでした。出せない理由は、入局式は部内会議の延長、そこでの詳細は部内の発言なので御容赦いただきたい、必要な要素は要旨に全て盛り込まれているとのことでしたが、結果、出していただけませんでしたし、説明者は来る来ないで二転三転しました。

なぜ求めたかといえば、入局式での会長訓示は新入局員への励みだからです。ほとんどの企業は、求めがあれば入社式、入局式は公開するでしょう、取材もさせるでしょう。NHK自身も他社を取材し、放送しているじゃないですか。会長になつてからは三年たつても全文公開できない。つまり、それだけ局の雰囲気は萎縮している。これを早く元に戻していただくことを皆様をお願いを申し上げて、私の質問を終わります。

ありがとうございました。